

# ロシアの大学における言語生態環境の保全を目指した 文語のクラスのデザイン —教材内容を自分の生活とつなげる—

マフラコワ アレクサンドラ

## 要 旨

本稿では、ロシアの大学で日本語を専攻している学習者を対象とする文語クラスを通して、学習者の言語生態環境の保全に向けた有効な示唆を得ることを目的とする。事前課題として課された書き換えタスク、教室内でのグループワーク、学習者が自ら生きることと関連づけられる教材文の内容という三点から特徴付けられるデザインの文語授業の教室実践を行った。本稿では主にその3つ目の点、すなわち学習者が生きる社会と関連づけられる内容に着目し、学習者の言語生態の保全が可能になるかを検討した。その結果、学習者は、歴史上の社会問題を鏡として自分が生きている現代社会を見ることで、自分が生きることと教材文の内容を結びつけ、自己を起点にした理解を形作っていることが分かった。教室で学ぶ知識を実際の生活と結びつけ、その中の自分自身の立場に対する認識を向上させることができたことから、本研究が提示した文語クラスのデザインは学習者の言語生態環境の保全に意義があったと考える。

【キーワード】 文語クラス、言語生態環境の保全、社会問題を取り上げた教材、グループワーク、自己を起点とする

## 1. 問題の所在: 文語クラスの現状と課題

ロシアにおける伝統的な文語クラスは、日本語を主専攻とする中上級の学習者を対象として開講され、現代口語日本語の成立以前に記述語として使われた日本語を教える授業である。極東ロシア国立教育大学の東洋語学部での日本語主専攻3年生対象に開講され、筆者が2005年から2年間担当した「文語入門」もその一つである。筆者は、文語で書かれた文章の統語的な理解を授業の目標とし、その下で文法項目中心のシラバスを作成し、授業では、各々の文型の使用規則に関する説明を重視した。また、こうした学習内容は、他の大学の例にならって、教師主導で授業を行った。つまり、文型の作り方及び使い方、また例文の意味が主に教師によって説明され、学習者には、教師の文法説明を軸に展開される講義を聞いて理解することが求められた。このような統語的読みが重視され、学んだ言語は、効率的(量が多く、速く)に学習者の頭に詰め込まれた文型の集積に過ぎないと言うことができる。これは筆者の文語クラスだけでなく、文語クラスで一般的に採用されている教授法である。

しかし、文語は、他のどの言語とも同様に内実を伴った言葉である。日本の高等学校国語科における古典の指導の新しい展開を論じた西辻(2011)は、古典の学習を通して、学習者は「自分の生き方を見つめるとともに進むべき方法を模索し、自らのアイデ

ンティティを確立していく。古典とは、急速に変化を続ける現代にあって、現在の自らの位置を確認する灯台でもある」と述べている。即ち、長期にわたって継承されてきた文語で書かれた文章は、人間とは何かを教え、生き方について考えるヒントを与えてくれるものであると考えられる。しかし、先に見たような統語的な読み一面化されたロシアの文語クラスでは、学習者がこうした可能性を享受できないと考える。テキストの内容よりも、テキストの文がどのような要素から構成されているかという統語的な分析が追求されていることから、文語を学ぶ意義が縮小していく。その結果、文語の学習は学習者の人間活動とは関係のない行為、及び教室外でも役に立たない存在として捉えられる恐れがある。

また、情報が教師一人の視点だけから提供されることから、学習者は、今までの学習や経験を通して身につけたいわゆる既有知識をはじめ、周りにある多様なリソースを活用する能力を熟達させることができないばかりか、自分がどのような問題を持っているかの自覚さえできない(分かったかどうかさえ判断する余裕がない)。それゆえ、教師は、学習者が理解に躓き解釈ができなくても、それを把握することが難しく、適切なサポートができない。他方、学習者は、自分の問題を自覚できないため、教師に質問することも、自分の問題を訴えたり相談したりすることも憚ならない。つまり、新しい知識を自分自

身が持っている知識と結びつけることができず、既存の知識のネットワークから離れた知識に留まってしまい、他の状況で生かされにくいと考えられる。

以上を踏まえて、本研究では学習者が「自分の生き方を見つめる」ことを促す学習内容を自分自身のリソースや能力と結び付けたり、自分なりの解釈を創造したりすることで、自分自身の知識のネットワークを構築する環境の提供を目指した文語クラスをデザインして実施し、その可能性を実証的に探ることを目的とする。

## 2. 理論的背景と先行研究

### 2.1 言語生態学から見る言語

従来の言語教育では、言語能力を含め、人間の知識が基本的には外部世界の情報として人間の内部にコピーされることで所有されると考えられてきた。また、学習を通して得た知識は、学習者の生活に直接的には繋がらないことが多いといえる。それに対して、現代社会における言語と言語教育を新しい視点から捉える言語生態学は、「言葉は人間活動の中で、個人内の認知活動や社会における人とのコミュニケーションなどの人間活動と一体化して社会・認知・情意・文化的な機能を担っている」(岡崎 2008)として、言語と人間活動の関係を分離できないものと主張する。言語を、「人間や人間活動から切り離された『分離された実体』としてとらえる代わりに、人間活動諸領域すべてを言語活動が支えており、その言語活動の媒体として個々の言語がある」ととらえる」(岡崎 2005)。すなわち、ことばが人間活動の中でうまく機能していれば、人間生活もよい状態にあることになる。この場合は、「言語生態の環境」、つまり言語による認識、コミュニケーションの活動や、それらが形作る学習、社会環境などが整っているとされている。逆に、ことばの認知、コミュニケーション機能が働いていない場合、言語生態環境が悪く、整っていないという。このように、学習者の生活と現実の人間活動から切り離された学習内容や一方的な学習の仕方が使用されていた従来の文語クラスにおいては、言語の使われ方があらゆる意味で限られており、言語生態環境が十全に整っていない状態にあると言えるだろう。

そこで、以下では、文語の授業における言語生態環境はどうあるべきかについて考えていきたい。そのため、言語生態学を理論背景としてなされた日本

語教育の領域における先行研究を概観する。

### 2.2 言語生態環境の保全に向けた先行研究

具体的には、日本語の教室における言語生態環境の保全に向けた実践研究を報告した楊(2010)、房(2011)、アリアンティ(2011)を紹介する。

楊(2010)は、中国の大学の日本語教室における日本語の運用(言語生態の保全)、及び社会的関係構築(人間生態の保全)を問題として取り上げた。その課題を解決するために、楊は、精読授業にグループワークを取り入れ、コミュニケーションの手段として機能するような言語使用と教室内における人間関係の改善を目指した。翻訳タスクでは、事前課題として中日翻訳を課すことで、学習者は自分なりの翻訳案をもってグループ活動に参加し、積極的に他者と関わり合い、活動は協力的関係の下で進められた。事前活動では、学習者の持つ既有能力は十全に発揮でき、認知能力が活用されたことから、言語生態環境の保全がなされたとされている。つまり、学習者が母語の中国語で培われてきた文化・情意・認知などのさまざまな既有能力が発揮され、自分が言いたいことが外国語である日本語でもより明確に言えていた。それに、外国語でどう言えばいいかと考えることを通して、自分自身の考えを整理し、思考能力をよりよく生かすことができた。

房(2011)は、音声のクラスの言語生態環境が保全されていない原因として、自己モニタリングの欠如という問題を取り上げ、自己モニタリングを促す日本語音声教育として、言語生態学アプローチに基づいた「ピアモニタリングモデル」を提示した。「ピアモニタリングモデル」とは、ピアワークという授業における学習者間対話と、授業前の準備と授業後の復習という機能を果たす一人学習を繰り返す音声教育モデルである。それぞれの活動の過程を分析した結果、発音基準を創り上げることを目指したピア活動において、言語の使用がうまくいったグループとそうでないグループがあったことが分かったとしている。そこで、言語使用を背後で支えるものは何かを探るためにこの2つのグループを比較し、どのような違いがあるかを検討したところ、母語や日常経験、身体感覚といった、自分が持っている既有能力を十分に活用することや、協働で説明を生成することができなかった学習者たちは、妥当な答えを創り上げること

に成功していなかったことが明らかになったとしている。

この二つの研究から、言語教室の言語生態環境の保全のためには、教師と学習者間の対話を支える協働学習と、母語で培った能力を含む学習者の既有能力を発揮させることが有効であると考えられる。楊(2010)はその手段として母語で書かれた作文を日本語に訳させる事前課題と母語でなされたグループワーク、房(2011)は日本語の音声、母語の音声体系と比較・調整しながら理解する過程を支える発音学習日記を使用した。

しかし、文語を学ぶ際、母語であるロシア語と日本語の文語との相互交渉だけではなく、学習者が今まで習得してきた日本語の現代語の知識を取り込むことが必要であると考えられる。こうした三つの言語体系(ロシア語・文語・現代口語日本語)を同時に発揮させるために、日本語の文語から現代語への書き換え<sup>1</sup>をするという活動を提示したい。

続いて、言語生態環境の保全に必要な要点として、楊(2010)と房(2011)が提案した授業の取り組みのみならず、学習内容について考えなければならない。アリアンティ(2011)は、言語生態環境の保全を目指す持続可能な日本語教育<sup>2</sup>において、インドネシア人の日本語学習者を対象としたアカデミックリーディングの授業を構想するにあたって、学習者の多くが直面している生活上の問題や困難などをテーマとして教材を作った。そしてその教材を使って、自分の問題を自覚し取り上げ考えることに重点を置いている。そして、実践授業のテーマとして、『首都ゴミ戦争の現場見る プカシ市バンダル・ゲバン』、『移住一家 スラムに住む』、『ジャカルタ、乱開発で2025年に水没の危機』、『インドネシア：民族語をハングル表記…文字のない少数民族』というインドネシア人の学習者のために身近な地域のテーマを取り上げた。アリアンティによると、これによって学習者は自分の生活と比較し統合して、つまり、自分に結び付けて読むことで、自分や自分の国についてよりよい理解を作り、社会の中で自分がどう生きるか考えるようになるだろうと結論づけている。そして、学習者はこれができるようになれば、論文を書くことは学習者にとって意味があるものになり、一連の文型練習としてのみならず、内容について考える読解の授業として、学習者の社会生活のために重要な

役割を果たすと述べる。

## 2.3 言語生態環境の保全に向けた文語クラス

2.1節では、外国語を含むどの言語でも人間活動と繋げずに学ぶと、言語がもともと担っているコミュニケーション機能が失われ、十分に使用されないことが確認できた。それを踏まえて、文語クラスに相応しい言語生態の保全を促す手立てを考えていきたい。

第一に、教室内で学んでいる言語は、外の生活から離れて存在する実体ではなく、その言語を取り巻く社会的状況の影響の下で、学習者がその状況を意識できるようになる必要がある。

こうした意味での文語とは、単なる文語で書かれた古典文学ではなく、文語が生きていた時代の社会を示す文章として考える必要がある。それゆえ、アリアンティの実践を念頭に置き、本研究でも文語クラスで使用する教材の選択に重点を置く必要性を訴えたいと考える。

本実践のテーマとして全世界及びロシアの社会が直面している「言語と戦争」に関わる問題を取り上げた。本研究が対象とする文語入門科目では、現代語に近い明治以降から戦後直後まで使われた書き言葉に重点が置かれている。当時の社会状況は二度に亘る世界大戦に見られるように日本及びロシアでも世界でも戦争が多く引き起こされていた。そのような戦争の世紀といわれた20世紀と、21世紀に入った現在は違うかといえ、必ずしもそうとはいえない現実がある。当時の事情に対する認識を深めることによって、現在の問題に対する理解も深化するだろうと考えられる。また、言語の教室である文語クラスでは、言語使用者としての学習者の言語に対する認識を向上させることも重要である。複数の言語の話者である私達にとって、言語がどんな存在であるかという問題を意識させることは重要である。それによって、学習者が言語を、今後の仕事に役に立つ手段としてだけではなく、人間の認知の形成や人間関係の築かれ方へ影響を与える手段として認識できることが期待される。

以上を踏まえて、坂口安吾の「外来語是非」、大隈重信の「朝鮮半島に対する日本語教育」、「平民社の反戦論」の3つの資料を教材として選択<sup>3</sup>し、全世界及びロシアの社会が抱えている「言語と戦争」という現実の問題と学習者が生きることを繋げて考えることを狙いとした。

第二に、学習者が習ったことがない新しい言語(文語)を、ゼロから教えなければならないとする従来の言語教育の立場に対して、言語生態学では、学習者は自分自身の既存能力や彼らの周囲にいる他者の認知、知識、能力を活用することで学習が成り立つと考える。つまり、教室の中で、学習者間あるいは学習者と教師の間で、知識、能力、言葉などの交換が自由・活発にできる関係が必要である。本実践では、それらの関係を創り上げるために、学習者各自の既存知識の活性化を促す書き換えタスクを課す事前課題と、学生が教室でこの知識を自由に発揮し、交換できるグループワークを導入した。

### 3. 目的と課題

本研究では、ロシアの大学で日本語を学ぶ学習者を対象とする文語授業における言語生態環境の保全に向けて有効な示唆を得ることを目的とする。そのため、学習者が生きている現代の問題を扱うことのできる文語のテキストを取り上げた。それぞれの既存知識を発揮しながら論じ合うことで、学習者が、テキストのテーマを自分の生きることと結びつけて理解することを目指す文語クラスの教室実践を行い、そこで、学習者の言語生態の保全が可能になると言えるかを検討する。そのため、以下の課題を設定した。

研究課題：学習者は、自分が生きることと教材の内容をどのように結びつけているか。

## 4. 実践の概要

### 4.1 実践の場所・参加者

実践は2011年3月11日から4月2日にかけてロシア極東国立人文大学東洋語学部日本語科の3年生と4年生に対して、それぞれ8回ずつ行われた。日本語科は20年の歴史を持ち、ハバロフスク地方における日本語教育の中心的な役割を担っている。学習者の専攻選択の主な動機は、通訳者・翻訳家、日系企業への就職、留学、日本文化への興味などである。本稿では、参加者の4年生の12名のデータを分析する。その理由の一つは、3年生のグループは所定の時間内に三つの資料を全部カバーすることができなかったため、本研究では、全部カバーできた4年生グループのデータだけを

分析対象とする。

### 4.2 授業のステップ

言語生態学の視点からピアモニタリングモデルを提起した房(2011)を参考に、一つのテキストに対して5つのステップを考案した。この5つのステップは教室内外を連携し、学習者グループのペースに合わせて、概ね2コマ(1コマは90分間)あるいは3コマを使った。教室内外では4～5人のグループ活動がメインであり、教室外の事前課題は一人学習として遂行された。ステップは以下の通りである。

【S1】一人学習：目的：学習者の既存知識を活用する。内容：事前に配られたテキストに関して、資料の歴史的な背景を探り、第1稿の書き換えタスク(注1参照)を作成する。

【S2】グループワーク：目的：仲間との議論を通してお互いをリソースとして有効に活用し、他者の意見を知る。内容：4～5人のグループで、各自で作った書き換えを検討する。議論は母語で行われる。また、共有議論、つまりグループで話し合った意見を共有する時間が設けられた。

【S3】一人学習：目的：授業で議論したことや他者の意見を振り返り、それに対する自分自身の視点を得る。内容：【S2】で行ったやり取りから得た知識を活用し、第2稿の「書き換え」を作る。

【S4】フィードバック：教師とのやりとりを通して、テキストの意義、言語の特徴を考えながら、文章の理解へ新しいヒントを得る。

【S5】一人学習：学習者が教師にもらった第2稿書き換えに対するコメントに答え、授業で議論したことや他者の意見を振り返り、それに対する自分自身の視点を得る。

## 5. 結果と考察

### 5.1 分析データ

本稿で対象にするのは、資料3「反戦論」をめぐる4年生全員で行われたステップ2の共有議論の際のやりとり(25分前後)である。以下に反戦論の現代語訳を示す。

学習者は最初のステップ1の一人学習において、資料3(「反戦論」)で取り上げられている問題に対して自分なりの解釈をした上で、同様の問題が取



戦争はついにやってきた。平和の攪乱はやってきた。罪悪の横行が来たのだ。日本の政府は「開戦の責任はロシア国の政府にある。」と言う。ロシア政府は「開戦の責任は日本国の政府にある。」と言う。これを見ると、両国の政府とも戦争は避け、平和を重んじるべきを知っているようである。少なくとも平和を乱したという責任は逃れようと望んでいるようである。その心は良しとしたい。そのように平和を乱した責任は、両方の政府かあるいはどちらか一方の政府にあるのである。そうだと、戦争責任は政府にあり、我々庶民には関係がない。しかし平和が乱されたときに起こる災禍は我々庶民が全部引き受けることになる。彼ら平和を乱した人は少しも罰を受けずに、その責任は常に我々庶民の肩に転嫁されるのである。こうなると我々平民はどうしても戦争を否定しないわけにはいかない。速やかな平和の回復を祈らないわけにはいかない。このためには演説や文筆、その他あらゆる平和的合法手段で運動しないわけにはいかない。だから、私は既に開戦した今日でも、私の口があり、私の筆があり紙がある限りは、戦争反対を絶叫するのである。そうしてロシア国における我が仲間の庶民も必ずやまた々態度と方法をとると信じる。いや、イギリス・アメリカ・ドイツ・フランスの庶民、特に私の仲間たちは、ますます競って私の事業を助けてくれると信じるものである。

(毛利 意識／／[http://www.himawari.or.tv/cgi-bin/02/2007/2008/02/post\\_107.html](http://www.himawari.or.tv/cgi-bin/02/2007/2008/02/post_107.html))

り上げられた記事やエッセーなどの資料を探すことが課題とされていた。そして、ステップ2では、教室内でまずグループ毎に一人学習の結果を共有し、その上で、次にクラス全員で議論をした。以上のデータを分析対象として取り上げる理由について述べる。本稿に取り上げた研究課題では、学習者は歴史的な事象に対する理解を通して自分が生きることと教材の内容を如何に結びつけているかに注目する。そのため学習者がタスク自体に関する疑問や困難点だけではなく、自分の意見を自由に言えるようになる必要がある。学習者が馴染みのないコースのはじめに、それを求めることは難しい。それゆえ、学習者がそのような議論への慣れができてきた3つ目のテキストをめぐる議論をデータとして使うことにした。また、グループごとの議論に続く全体での共有議論では、学習者の視点がさらに拡大したり、深まったりすることが目指されており、共有議論でのやり取りを見る意義があると考えた。

## 5.2 分析方法

教材文の内容をめぐって、テキストの内容と自分が生きることとの繋がりを学習者がどのように見出しているかという観点から文字化データを解釈するに当たって、アリアンティ(2011)を参考にした。アリアンティ(同上)は、持続可能性日本語教育を目指す読解授業を行い、学習者がテキストの内容をめぐって、読んだ内容と自分との繋がりをどのように見出すかという観点から文字化データを解釈した。その結果、学習者は「一つの社会問題から出発し、次の社会問題に結び付けて考える」、「様々な立場に立って考える」、「社会問題と自分との繋がりを認識し、問題解決を考える」というステップでテキストの理解が進んでいることが明らかになったとしている。アリアンティの実践では自国の現在事情に関する問題が挙げられた資料が使われたのに対して、本研究

の実践では教材として100年前の日本における問題を論じる資料が使われている。従って、学習者の議論はさらに複雑になる可能性が予測される。また、アリアンティの読解授業では、対話的問題提起学習のステップに沿って問いが与えられていたことから、議論が問題解決に向かって収斂していくことが期待された。それに対し、時間的にも空間的にも遠く離れた20世紀初頭の日本の問題のため、解決策に収斂していくことは期待できない。

そこで、課題として立てた「自分が生きること」の「自分」という範囲に含まれる概念として、「時間」「場所」「経験」を決めた。そして、それをもって、教材文に取り上げられた問題の議論において、学習者自身の生きている「時間(現代)」、「場所(ロシア、ロシアと他国の関係)」、「経験(友達、親戚の経験も含め)」に関する例が挙げられる場面を抽出した。

## 5.3 結果と考察

「学習者は、自分が生きることと教材の内容をどのように結びつけているか」について、結び付けには次のように4つのパターンがあることが分かった。

学習者は、教材文で取り上げられた問題を昔に存在していた遠いものとしてではなく、現代社会にも存在し続けている身近な問題として実感した。それと共に、②世界のどこかで起きている問題が自分の住んでいるロシアにも存在していることを意識化した。さらに、③それらの問題とロシアという国を構成しその一部である自分自身との繋がりを見ることができた。また、④授業で取り扱った資料で論じられている問題を互いに結びつけたり、様々な社会問題の間の繋がりを探ったりした。

以下では、このうち三つのパターンが見られる会話例を取り上げ詳細に述べる(議論は主にロシア語でなされたが、字数の制限で、本稿では日本語訳のみ記載する<sup>4)</sup>。

【会話例①】 歴史上の社会問題を鏡として現代社会の問題を見る

発話番号	話者	発話内容
1	Tanya	私たちは、ニホンノセイフ、ごめん、ロシアのセイフ、全部日本政府のせいだと言って、
2	Dasha	日本の政府はその逆で、ロシア政府が悪いって、
3	Tanya	というのは、両側が互いに責任をなすりつけ合っていることだ。そして、こうして政府は自分のあまり好ましくない行為の言い訳をするため、よく他国、他者の行為の所為になっている。やはり、「攻撃は最大の防御なり」
4	Nadya	現在とそっくり、イラクとアメリカ、
5	Lyuda	灯台下暗し。もっと身近な例があるじゃん。ロシアとチェチェン、アフガニスタン
6	Pasha	チェチェンは全くだ。何のために始まったのかはもう誰も覚えていないだろう。
7	Pasha	今のところだったら、やはりマネーロンダリングのためだよ。せいぜい、ロシアの場合、
8	Tanya	私が探した記事にもそう書かれている。ただし、これはイラクのことだ。 <u>イラクの戦争は、アメリカ政府が利権目的で始めたが、結果として国民が苦勞している。</u>
9	Anya	私の記事のほうにも、似たような表現があった。実は、それは既に2500 年前にソクラテスが述べている。「金への愛が戦争を引き起こす」
10	Teacher	やはり現在もそのまま切実ですよ。

最初、1Tanya と2Dashaは、「日本の政府は曰く、其責露国政府に在りと。露国の政府は曰く、其責日本政府に在りと。」という教材文の記事に示された問題の一つとして戦争の責任に関する問題を述べる。彼らによると、政府は、両方ともそれぞれの目的を持って戦争を引き起こすが、その目的は必ずしも国民が納得するものではないので、国民に知られないように、相手が戦争を始めたとして非難するという方略をとる。つまり、相手の側を非難することで、各々の支えである国民の協力を得ることができる。そして、その意見をより分かりやすくするため、4Nadyaは、ロシアのメディアでよく話題になっているイラクとアメリカの関係を例示している。それに

対して、別のグループのLyudaは、さらによく知られている例として、ロシアが関わっている、あるいは関わっていた紛争(チェチェン、アフガニスタン)を出している。それに続いて、Pashaのチェチェンでの紛争の原因に対する意見を契機に、戦争が引き起こされる原因に議論が移り、「マネーロンダリング」(7Pasha)と「金儲け」(9Anya)が現在の戦争の原因として挙がっている。以上から、学習者はお互いの意見からヒントを得ながら、20 世紀初頭に起きた日露戦争開戦時の日露両政府の方略を、現状に対する知識と結び付けて理解し、現在の社会における問題を吟味していると言える。

【会話例②】 世界で起きている問題と自国の社会問題との間に繋がりを見出す

発話番号	話者	発話内容
61	Nadya	勿論、今はハンセンなら、戦争に行かないというのが一番論理的な行為でしょう
62	Pasha	は一、そんなに簡単だと思うのか。
63	Nadya	工夫して兵役免除を受けることができるのでは...
64	Katya	私は大反対だ。義務を免れようとするのなら、それは本物の男性ではないと思うよ。愛国主義もあるし
65	Lyuda	<u>ロシアで愛国って、まだあったの？</u> 大祖国戦争の場合は、そうだったのかもしれないが、現代の戦争は愛国には関係がない。お金だけだ。誰かがお金をいっぱい手に入れたがっているという理由だけで、自分の弟を殺してほしくない
66	Nadya	<u>私のお兄さんが行ったとき、すごくみなさんが心配していたが、大丈夫だった。戦争に行かせられたらどうなるか、考えることさえしなかった。でも彼自身が行きたがった。戦場に直接行きたがっていたわけではないが、<u>グルジアとの国境のあたりで兵役をした</u>って。給料が高く、出世も早いし</u>
67	Lyuda	それはひどい！殺されたら？
68	Nadya	彼は、自分が殺されるかもしれないことについてあまり考えていないようだった。もうすぐ子供が生まれるが、住む場所がない。だからお金を稼ごう、というものだった。
69	Lyuda	そうすると、やはり悪循環になるんじゃない？要求があれば…戦争への素晴らしいプロモ

学習者たちは反戦の姿勢を言葉で示す以外にどのような方略があるかを考え始めた。まず、63Nadyaが兵役免除を受けることを挙げる。実は、ロシアでは、男性は18歳になると兵役の義務があるが、特定の病気をもつ若者は兵役免除を受けることができる。つまり、63Nadyaにとっては、兵役免除を受けるという行為は、戦争に行かないことに加えて、反戦姿勢を貫くという意味をもっている。しかし、64Katyaは、その方法は適切な問題解決にならないと考えて、その裏側にある別の社会問題を取り上げた。詳しく言うと、ロシアの社会においては、近年、ロシアが関わっている戦争は、一握りの人の利権のために行なっているというような意見が強くなっている。それに伴って、愛国心は弱体化してきており、あらゆる方法で無意味な戦争に行かせられないように、兵役免除を手に入れようとする若者が多くなった。それに関連して、愛国心に関わる問が出てきた。つまり、64Katyaにとっては、兵役とは愛国心を示す手段である。一方、兵役が自分の家族にとって切実な問題である65Lyudaは、現在の兵役は愛国心に関係がないものとなったと考えている。Lyudaの弟は、いつか兵役に服さなければならなくなるが、そうすると現在起きているどこかの紛争地に行かされる恐れがある。65Lyudaは、愛国心に駆り立てられ、自国を守るという志で行った大祖国戦争と全く違った、一握りの人々のお金儲けのために、弟が自分の命をかけざ

るを得ないという状況を嫌悪している。Nadyaは似たような経験を持っていたが、彼女の兄は、自分の家族の生活を保障するために、再度軍隊に入って、紛争が多発し比較的給料が高い国境の地域に行きたがっているという(66Nadya)。生計を立てるには命を賭けざるを得ない人がいるという現在のロシアの社会の仕組みは、67Lyudaにとって切実な社会問題の発見への契機にもなったと言える。お金を稼ぐために戦争、兵役に就くことを望む(若者)層が生まれ、戦争への欲求が過熱してしまうことに対する危惧を69Lyudaが持っていることが分かる。

学習者たちは教材文から取り出した「反戦活動への取り組み方」といった大きな問題を議論しているうちに、それに関連付けながら自分の経験を挙げることで、それを自分達の身近な問題に繋げ、現在のロシアにおける様々な課題を確認することができたことが示された。このように、学習者たちはお互いの経験を知ること、現代社会の問題に対する新たな認識を得たことが分かる。

なお、66Nadyaが、「私のお兄さん」という身近な、いわゆる正体のある他者を出すことによって、テキストから発端を得たこの問題との距離がぐっと近づいた。こうして他の学生も、問題にリアリティを与え、次に述べる「自国における社会問題と自分を繋げる」懸け橋となっていることが窺われる。以下に詳細に見ていく。

### 【会話例③】 自国における社会問題と自分を繋げている

発話番号	話者	発話内容
87	Lyuda	国(戦争を)否認しないと。日本みたい、あの憲法を持っているよね
88	Masha	戦争の放棄みたいな感じ。[あったよね。そして、
89	Lyuda	[そうです。つまり、] どうしてロシアはそうしないのかしら
90	Pasha	政府にはそう思っている人がいない
91	Teacher	政府に入らないと何もできない?
92	Pasha	少なくともロシアはそうだと思う
93	Tanya	いや、でも、あの最低生活保障金のケースからすると、必ずしもそうではないと思う
94	Teacher	ところで、結果がどうでしたか。結局増加されましたか
95	Tanya	されました。
96	Pasha	Tanyaもできるの
97	Tanya	必要であれば、できる。
98	Pasha	ハンガーストライキ、一番効率的だ{笑}
99	Tanya	目的に応じて
100	Teacher	ハンセンロンによると、できそうなものは?
101	Masha	このような記事を書いたりでも
102	Katya	書けないなら?

学習者たちは、戦争が社会的現象であり、従って人間によって左右されるべきものであると考え、誰がどのような姿勢を表明すべきか、あるいは表明できるかについて論じ続けた。まず、戦争の否認は、国(政府)がなすべきことだという意見が出された(87Lyuda)。続いてLyudaは、具体的な例として、日本国憲法第9条に規定されている戦力の放棄を挙げている。しかし、90Pashaは日本とロシアを比較しながら、ロシア政府には反戦の姿勢を示す勇気のある人がいないため、国民が反戦をいくら叫んでも意味がないというような姿勢を示している。それと違って、普通の人でも政策に影響を与えることができると考える93Tanyaは、去年(2011年)一人の20代の若者が現行の最低生活保障金では十分な生活ができないという問題を訴えたケースを挙げている。その若者は、最低生活保障金で賄える食費にあたる金額で、一か月間生活をしたのである。一日に費やせる金額を計算し、主食の穀類を買って置いて、毎日食べたもの、その量、調理法、体重や身体の具合について逐一公表した。大学生である彼は、勉強し続けながらこの実験を行った。その月の月末までには元気な若者だった彼が、一か月後には約8キロも体重が落ち、疲労し、身体を動かしたり、出かけた気力さえなくなった。健康診断の結果も悪くなった。このことは、インターネットを通して公表され、他のマスメディアでも話題になった。結果として、最低生活保障金の金額が増額されたのである。この若者の行為を参考にして、Tanyaは自分に何ができるかについて考え始め、「必要であれば何でもできる」というような積極的な姿勢を表明している。それは、他の学習者にとって、自分は何ができてかについて考え始めるきっかけになった。

101 Mashaは、書くことを通して、反戦を社会に訴えることができるとして、教材文に提示された方法を自分に当てはめている。続いて、全ての能力を動員しても自分の反戦という考えをうまく表現することができなかったらどうするかという102Katyaの疑問に対して、103Tanyaは、「訳せるだろう、せっかく勉強した日本語」と自分たちの専門の日本語について意識し、自分自身の能力に合致した行為ができると主張している。

学習者たちは、政府と国民が離れすぎ、国の政策が市民の声を反映していないとして、現在のロシア社会の問題点を捉え、検討を深めるなかで、個人の声が周りの人やマスメディアを動かし、政府にまで届いた事例を取り上げ、その事例を自分たちの行為に結びつけることがで

きた。こうした議論を通して学習者の、ロシアにおける政治上、法律上の問題への意識が高まったことが窺われる。また、そのような問題に対して自分自身ができる行為を自分の能力や可能性と照らし合わせながら、社会の構成員としての自分を位置づけている。これは、「自分の生き方を見つめるとともに進むべき方法を模索し、自らのアイデンティティを確立していく」(西辻 2011:28)と言えよう。

## 6. まとめ

学習者は、「今」から離れた時代に現れた戦争に関するあらゆる社会問題が、現在の社会でも存在していることを認識した上で、テキストに挙げられた問題から出発し、それを現在の問題と繋げながら、社会の仕組みに対する知識を構築していると言える。また、日本の社会における困難として取り上げられた問題は、他の国でも、さらに自国のロシアでも発生し、存在し得るということに気づき、身近なものとして捉えている。さらに、自国における問題を、自分自身の生活に結びつけた存在として認識することができたと言える。要するに時間的空間的に離れている社会問題を自分が生きている時代と国に相当させ、自分と繋げて、現在社会における自分自身の立場を認識することができたと言えよう。言い換えると、テキストと自分と結び付けて、自分自身の姿勢を表現することによって、学習者たちが社会における問題に対する理解をより深く構築できるということである。それとともに、学習者の認知能力を支える母語能力をはじめ、さまざまな既有能力のネットワークを形成することで、そこにさらなる新しい言語の力を編みこまれることが可能となったと言えよう。

2.1節では、言葉は人間活動と一体化して社会・認知・情意・文化的な機能を担っている(岡崎 2008)という言語生態学の主張を紹介した。上のような結果から、本研究が提案した文語クラスにおいては、一人学習と後続するグループワークの統合が、自分自身及び仲間の既有知識の活用を支え、促していること、そして、個人内の認知活動や周りの人とのコミュニケーションにも関わっていることが明確になった。学習者は文語のテキストに登場した問題を彼らが生きている社会に当てはめて再検討し、学習と人間活動が切り離されたものでなく、彼らの生活と一体化していることを意識したと考えられる。

グローバル化の下で変動する世界の中で、言葉が内実を失いつつあり、人々の間でことばの内実がずれが生じ



ているとしている(岡崎 2009)。そのずれによって形成される「通じ合えない関係」は、さらにことばへの信頼感の喪失を導き、誤解に変わってしまう恐れがある。その下で世界そのものが見えなくなり、自分の生き方も周囲から切り離され切り縮められることになる。

今回の実践でも、こうしたことばの内実のずれという現象が観察された。時代とともに、「戦争」、「兵役」、「愛国心」ということばの内実が変わってきていることが明確になった。会話例②には、祖父母の影響で若者世代にもよく知られている祖国を守るための戦争と現代のお金を手にするための戦争が比較されている。母国の実績を誇り、愛国心が強かった祖父母と父母の世代に対して、現代の若者の中には、自分に豊かな生活を提供できない国を愛する価値がないとする考えがしばしば出ている。また、兵役を受けるのが男性にとって自慢するべきものであったのが、現代は卑しまれるものになり、兵役を避けることが評価される場合も少なくない。会話例から見たところ、このようなずれが、世代の間だけではなく、異なった環境で育った学習者の間でも現れていることが分かった。しかし、学習者は、今回の教室実践に参加することで、自分が生きている社会における事象を表す言葉の内実のずれに気づき、それについて論じ合うことを通して、社会問題の関係を見ることができたと考えられる。このような気づきは、学習者が教室を離れても学習を持続する上で重要な役割を果たすと考えられる。

このように、学習者が周りの人間との協働で問題を新しい視点から見直したり、学習内容を実際の生活と結びつけたりすることを通して、文語クラスの言語生態が保全されたと言える。しかも、時間的にかつ場所的に離れた問題を、さまざまな知識や能力と結びつけることで、自分に近づかせることができることがわかった。そうすると、学習者は自分の視座を意識し、世界の事情、そこにあるコト・モノ・人の繋がりを自分との関わりを糸口として紡ぎ合わせることができると期待できる。

## 7. 今後の課題

本研究の実践では、書き換えタスクを導入することで学習者が既に持っている能力を発揮し、言語生態環境の保全が促されることが示唆された。さらに確証をえるため、書き換えタスクへの取り組み方(言語使用)をメタ的な観点から見る必要がある。例えば、学習者が一人学習の書き換えを作る過程で直面している問題とその解決策を言語化・可視化させることもその一つである。その方法としては、インタビュー、振り返りシート、あるいは

日記(房 2011)などが考えられる。

## 注

1. 第二言語教育には一般的に使われる母語と目標言語の間に行われる、いわゆる言語間訳(interlingual)に対し、「書き換え」はことばをことばで説明することを可能にしている言語内訳(intralingual)の存在である。さらに母語でない言語における言語内訳をする際、訳者が媒介言語として母語に頼らざるを得ないという指摘がある。このように、ロシア人の学生に、日本語の文語から日本語の現代語への書き換えタスクをやらせることで、学習者が持っている全ての言語体系に携わった知識を結びつける可能性が期待される。後輩の読者を想定しながら言語を使うことによって、自分の言語を振り返る可能性が期待されるので、文語のクラスに書き換えを取り入れることで自己内対話を支える環境の創造、及び心理的領域の保存を目指す。
2. 持続可能性日本語教育とは、岡崎敏雄によって提唱された言語生態学が教育の問題とされているグローバル化する世界の中で生活の上で必要な多面的なものの見方の育成を促す場を提供する教育である。
3. 資料の配列は、文法的な難易度や歴史的な背景を考慮しながら決めた。大隈重信の「朝鮮半島に対する日本語教育」は坂口安吾の「外来語是非」より先に書かれたものであるが、後者が扱っている外国に対する政策の捉え方や占領地に対する政策等のような知識を採用することで、この文章の背景もさらに深く「味わう」ことができることが予測される。「平民社の反戦論」もまた、それに主張される「反戦」という立場を、いかに言葉を使うことで表明できるかについて考えさせることをはかった。
4. 文字化の方法は、以下のような記号を用いた。  
? 疑問とイントネーションが上昇している箇所を記す。  
{ } 非言語的な行動を表す。[笑]のように記す。  
[ ] 発話は前後の発話と同時に発せられたことを示す。  
「」引用内容に「」を付与する。  
イタリックカタカナ 日本語による発話

## 参考文献

- アリアンティ・ヴィシアティ(2011)「内容重視のグルーブリーディングーインドネシア人の日本語学習者の場合ー」お茶の水女子大学修士学位論文(未刊行)
- 岡崎敏雄(2005)「言語生態学言論ー言語生態学の理論的体系化ー」『共生時代を生きる日本語教育』凡人社、503-554。
- 岡崎敏雄(2008)「グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題ー持続可能性言語教育原論ー」『筑波応用言語学研究』15、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース、1-14。
- 岡崎敏雄(2009)『言語生態学と言語教育ー人間の存在を支えるものとしての言語ー』凡人社。
- 西辻正副(2011)「高等学校国語における古典の指導の新しい展開」『日本語学：特集：文法を教えない古典の指導』明治書院 vol.30(4)、28-36。
- 房賢雄(2011)「持続可能性音声教育を目指すピア・モニタリン

グ活動の可能性—対話を媒介とした言語生態の保全・育成  
を通して—」お茶の水女子大学博士論文未公開  
楊峻 (2010)『大学の日本語授業におけるグループワークのデザ  
イン—言語生態学を理論背景とした研究—』外文出版社

ひまわり社 2007 年度教育実践マガジン(2012/06/21)  
[http://www.himawari.or.tv/cgi-bin/02/2007/2008/02/post\\_107.html](http://www.himawari.or.tv/cgi-bin/02/2007/2008/02/post_107.html)

まふらこわ あれくさんどら／お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了生

[alexandramakhrakova@yahoo.co.jp](mailto:alexandramakhrakova@yahoo.co.jp)

## Bungo-class in Russian University Aiming at Wellbeing of Students' Language Environment - Focusing on How Students Connect their "Self" with the Text -

MAKHRAKOVA Alexandra

### Abstract

Known as the Classical Japanese language, Bungo was a prominent literary form of Japanese until late 1940s. Some universities in Russia have set Bungo-classes aiming at students who major in Japanese in their curriculum. The purpose of this article is to present a valuable suggestion for a new Bungo-class aiming at language education focused on the concept of "language preservation", and, thus, we criticize the traditional idea that language is separate from language speakers or human activities. In order to preserve language in Bungo-class we introduced a preliminary rewriting-task: students were asked to transfer a Bungo text to Modern Japanese. We also integrated a group work task in which students discussed in Russian their rewriting-tasks, and Bungo texts related to students' life. As a result, students could not only reach the understanding of in-text information, but could also broaden their understanding by connecting the problems in Bungo texts with similar problems existing in Modern Russian society and their own experience as members of this society.

【Keywords】 Bungo, language preserving, individual-work, group work, "self"-centered understanding

(Graduate of Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)